

## OG訪問

17の診療科に1日700名の外来患者が来院する中核病院で、薬剤部総勢15名スタッフとともに薬物治療にあたる加藤さん。日々の業務と併行し研究・学習に取り組む姿勢は、病院薬剤師としてさらに上をめざす意欲を感じさせます。

札幌社会保険総合病院 薬剤部 薬剤師

加藤 亜弥子さん (薬学部薬学科2008年卒業)



## 患者さんの心のそばで。

「患者さんに頼られてるんだって感じた時のこと」。お仕事で最も心に残っている出来事について、加藤さんは続けます。「患者さんの目には、きっと医師は常に多忙に映り遠慮してしまうでしょう。『先生はいつも忙しそうでなかなか言えなくて、ついあなたに話してしまうね』と言われたんです」。

当初1年間は調剤業務がメインで、服薬指導など病棟活動にも参加するようになったのは2年目以降です。患者さんとの直接的な関わりを持つほどに、「心の通い合いの大切さを感じます。それが病院薬剤師ならではの“やりがい”なのかも」と静かに話します。現在、がん化学療法や緩和ケアの医療活動の一翼を担う加藤さん。「例えばがん患者さんが背負っている、痛みや苦しみ、不安や不満。そういった負の一面もありのままに話していただけるような、心の距離が近い場所にいたいですね」。



院外処方せん全面発行のため、薬剤部では内服薬や注射薬の調剤や院内製剤、抗がん剤の調製などを行っています。また入院患者さんの持参薬や健康食品などを調査・確認し服薬指導を行うなど、患者さんにとってより安心できる医療提供に努めています。

## チーム医療の一員として。

さらに加藤さんの業務は、カンファレンス参加、ラウンド、抗がん剤治療のレジメン管理にも及びます。その活動では常に、医師や看護師など他の医療専門職との連携が欠かせないものとなっています。

一例を挙げれば、医師に対し抗がん剤の副作用による患者さんの負担を減らすための支持療法として、吐き気止めの追加を提案するなど。また

看護師と加藤さんの間では、「これから副作用が出るケース、言動から強い心理的ストレスを感じるケースなど、注意が必要な患者さんについての情報共有に努めています」。時には、医師から副作用予防の対策や薬物療法の評価について意見を求められたり、看護師から輸液等の配合変化等を確認されます。加藤さんが薬物治療の専門家として、医療チームにとって頼もしい存在であることは間違いありません。



緩和ケアチームのカンファレンスで、患者さんに最も適した安全で効果的な治療を行うために、各専門職がそれぞれの立場から情報や意見を活発に交換。薬物療法の専門家である加藤さんは、チームとしてなくてはならない存在です。

## 同業の後輩や仲間と共に。

勤務先の薬剤部は、薬剤師研修センター実務研修生の研修認定施設および日本医療薬学会認定薬剤師制度研修施設に認定され、薬剤師養成機関としての機能も果たしています。当然、薬学部の実習生も受け入れ、「医療大の後輩たちもたくさん来ますよ。どの学生さんも初めは、患者さんとなかなか上手く会話が続きません」と笑います。けれど実習期間が終わる頃には、みんな強たくたくましく変わるそう。「かつて私が先輩から教えてもらったように、私も後輩へ生きる何かを、伝えられ



在学中は女子バスケットボール部に所属。部活の後に一緒にご飯を食べた仲間には、薬学部の同期生も多かったそう。「公私を問わず今でもよく会っています。話が合うので、楽しいです」

たらうれしいですね」。

医療大での加藤さんの一番の思い出は、「バスケットボール部で遠征した先の函館をみんなで観光したこと。あと、生化学や微生物の勉強をもっとしっかりやっておけば良かったです」と苦笑い。ご両親と同じ薬剤師を目指すため、郷里を離れ進学したものの「バスケット部が薬学部にはなかったので、ホームシックとは無縁でした」と言います。部活も学部も一緒だった友達との絆は、今もつながっています。

## 目の前の課題は経験を積むこと。

日進月歩で変わりゆく医薬品や薬物療法の最新情報を得るため、加藤さんは研修会や学会に積極的に参加しています。2011年9月に関東で開催された学会では、研究成果をポスター展示で発表しました。「フェンタニル貼付2製剤に対する皮膚水分蒸散測定器を用いた比較検討を、同僚をモデルに検討。研究そのものより発表のための準備の方が、大変だったかもしれません」。

その研究の出発点は患者さんです。「各製剤の特徴を理解したうえで貼付薬を使用すれば、薬物治療の精度向上に役立つかも、と思ったのがきっかけですね。加藤さんはこう続けます。「でも私は、病院薬剤師としてはまだまだ未熟。もっと引き出しをたくさん持っていないとダメだし、手持ちの引き出しをつなげて活用する力も足りません」。そのためまずは、経験値を増やすことに尽力。「できるならば、どんな患者さんの痛みにも対処できる薬物療法のスペシャリな引き出しを、私の中に積み上げていきたいです」。



院内業務に加え薬剤師会の研修に月に数回、各種学会に年1・2回ほど参加し、自己研鑽に努める加藤さん。旧友をはじめ頑張る同業たちに刺激を受けて、日々の業務への意欲を得ています。